D-2　名取市北釜地区、広浦地区　　2013年1月24日（木）

報告者名　島村　恭則　　被調査者生年　1945年（男）
調査者名　島村　恭則　　被調査者属性　元会社員、兼農業家
補助調査者　沼田　愛

はじめに

調査対象地区である北釜地区の住民は、大部分が名取市美田園の美田園第2仮設住宅に入居しているが、この仮設住宅には、杉ケ袋、飯塚、広浦など他地区からも被災者が入居している。このため、主に仮設住宅の集会所で実施した聞き取りの場にも、北釜住民とともに、他地区の住民が同席することが多かった。そして、会話は自ずから北釜と他地区との比較という話題になることが多く、調査者は、この経験を重ねるうちに、北釜とともに他地区住民の聞き取りも実施し、その中で北釜の暮らしの特性を把握するという方法がありえると考えるに至った。

こうした理由から、以下の聞き取り結果は、北釜に隣接する地区の一つである「広浦」についてのものである。

ベッカ（別家）の村

広浦は、「飯塚の次三男などが本家から田をちょこっと分けてもらって兼業農家で暮らすムラ」だという。広浦の町内会は、飯塚の飯塚町内会に属する。まさに飯塚の分村という位置づけである。飯塚や、そのベッカが多く居住する広浦には洞口姓が多いが、すべてが親戚関係にあるわけではない。大本家にあたるのは大同屋敷（近世期の飯塚大同屋敷跡）であるが、この屋敷跡に居住しているA家とB家の間で、どちらが本家に当たるのかははっきりしていない。したがって両家では、一方で冠婚葬祭がある場合は、もう一方に本家役を頼む、というようにしている。

ここは、兼業農家ばかりで専業農家はない。みんな勤めに出ながら農業をしていた。

広浦の農業は、48軒の兼業農家のうち2軒だけが野菜を作り、あとは稲作を行なっていた。農家は皆、勤め人としての仕事が主で、農業は「アルバイト」みたいなものだった。勤めに出ているので生活が安定しており、これに「アルバイト」が加わった。さらに、工場に土地を貸していて土地代が入る人もいるため、全体的に、広浦の生活は、裕福であった。ここの米は、砂地でないのでおいしかった。水も名取川から取水し、よい水を使っていた。

これに対して、北釜は、砂地で、ハモノ（葉もの）をつくっていた。北釜は、砂地であることを利用してよい野菜を作っていた。最近は、メロンとチンゲン菜で売っていた。北釜は、松林を伐採し耕地にしたときも、仙台新港を掘削するときに出た砂を持って来てこれを入れた。砂地を利用しての農業が北釜の農業だった。

開拓団

広浦には、「北原東」というところがあり、ここは、もともとヤチでヨシハラだったところに終戦直後に開拓団が入植した地区である。

開拓団の人たちの入植地は、戦災被災者などさまざまな事情を抱えた人たちに国が土地を提供したものだった。この人たちは何らかの形で下増田村内の住民と姻戚関係などがあり、周囲の人びとは、よその土地で聞くような、開拓団を蔑むような気持は持っていなかった。むしろ、広浦はわずかな土地を分けてもらってベッカになっている家が多く、話者自身もベッカの生まれであるため、無償で土地を提供してもらえてうらやましいというような感じを抱いていた。開拓地に居住し始めた人たちも、飯塚の町内会に入会していた。

写真１　被災住宅の仏壇。この住宅の家族は仮設住宅に暮らしているが、お盆のときには、この仏壇の前で読経した。

企業の進出

いまから 37、38 年前に、「開拓団」の近所に「日建リース」という会社が進出してきた。この会社は、足場などの建設資材の大手リース会社であり、仙台進出の拠点としてここに入ってきた。地元農家から土地を 15,000 坪購入し、資材置き場と工場にした。この会社の進出にはじまって、その後、約 30 社の工場（自動車関係、鉄工所、精密機械）、資材置き場（建築資材リース会社等）が広浦地区に入ってきた。

この現象は、開拓地の人びとをはじめ、広浦の人びとが土地を売ったり貸したりすることで生れたものだが、このようなことは隣接する北釜では生じていない。

これについて、話者は、「広浦は、兼業農家であり、「先祖伝来の土地」というものに対する執着はないが、北釜は、専業農家が多く、専業農家は、『土地は増やしても絶対に減らしてはいけない』という考え方を持っているため、企業の進出を受け入れなかったのだ。メロンやチンゲン菜を一生懸命、大々的につくっていて、土地を手放すという発想にはならないのだろう」と説明している。また、「500 坪から 1,000 坪ならば手に入れやすい」ということに加えて、空港のそばという立地条件のよさも、広浦に企業が進出している理由としてあげている。話者の勤務していた企業の場合、初代社長の「空港の近くはその県でもっとも気候が安定している」とする考えにもとづいて、広浦に仙台支店を開いたという。

このような広浦と北釜の違いは、利用価値の減じた松林をどのように扱ったかにも表われている。広浦にも北釜にも海岸に防風林があったが、広浦の場合、松林も工場に売られることが多かった。というのも、防風林の松林は、薪としても使用していたが、燃料として薪が用いられなくなると、松林の利用価値がなくなる。その際、北釜の場合は、前述のように開拓して耕地にしたのだが、広浦は、一部、耕地にした人もいたが、多くは、もう不要な土地だとして工場に売った。

広浦の農家は兼業農家で、勤め人が多いと前述したが、その中には、こうして広浦に進出してきた企業に勤めた人もいる。地元にやってきた会社だからということで、地元で働くつもりで入社したが、ホワイトカラーとして全国を転勤することとなり、管理職で定年を迎えたという人もいる。こうしたこともあることから、「広浦は、生活が裕福であると同時に、広い世間を知っている人が多い」と言われることが多いという。

被災住宅での盆

話者の自宅は、津波をかぶったものの、全壊は免れたため、建物は取り壊さずにそのまま残してある。1 階の壁面には津波の痕跡が生々しく残っている。

この住宅の家族は、現在、仮設住宅で暮らしているが、2 階は、津波にのまれなかったため物置のようにして使っている。

また、この住宅の仏壇は、津波にのまれたものの、流されることはなく残った。そのため、仏壇をきれいに掃除して再生させた。そして、お盆のときには、この仏壇の前でお経をあげた（僧侶を呼ぶことはしなかった）。

話者は、こうした住宅は、津波被災の記憶を語り継ぐための重要な「文化財」であるから、ぜひ保存してゆくべきだと考えている。